

佳作

## 心配性なお母さん

福岡県 福岡県立筑紫高等学校一年 三宅 由莉

お母さんは優しいしおもしろい。私の事をよく見てくれている。けれど少しいやになってしまいうらいの心配性だ。今ではその心配は愛してくれている証拠だと分かるけれど少し前の私はたどうざいと思っただけでなかった。中学三年の夏。私の中学生生活最後の吹奏楽コンクールがあった季節。私は吹奏楽部に所属しており、トランペットを吹いていた。その頃は私も含め吹部のみんなが九州大会金賞、全国大会出場という目標のために死に物狂いで部活をしていた。休みなんてないし、コンクールで演奏するたったの二曲に全神経を集中させている。さらに受験生でもあったため、部活が終わったらすぐ塾に行っただけで勉強していた。だから家でゆっくり過ごす、くつろぐことはほぼなかった。でもそれでいい。ここで踏ん張れば全国大会に絶対に行けるから。そう思っただけでいたものの私の体はすでに悲鳴を上げていた。久しぶりに家に早く帰れた時があった。スマホを見ようとするとお母さんが話しかけてきた。

「お母さんが私に話す。

「ゆうりはね、生まれてくるときに一回死んじゃったの。」

私は「何言ってるんだ」と思いながら話を聞く。

「一回死んじゃったんだけど、ゆうりが頑張ってくれたおかげで生き返ったのよ。生き返っても一生物体状態だってお医者さんから言われたけど、今じゃ勉強も部活も自分の限界を超えられる元気な子に育ってくれた。少し生意気だけだね。」

私はその話を聞いて、

「最後の一言はいらなかな。」  
と涙ながらにくすっと笑い返した。お母さんは、

「あなたが生まれた頃、大変な思いをしたのを横で見ただからこそ誰よりも心配しちゃうのよ。」  
と続けて言う。私はお母さんが心配性な理由が分かり、お母さんへの有難さ、申しわけなさが一気に込みあげてきた。私は、

「ありがとう。ごめんね。」  
と言い、目を閉じた。

それから数日後、コンクールの地区大会、支部大会で金賞代表をもらい、いよいよ県大会の前日になった。部員全員で気合入れをして家に帰ってきた頃。学校から吹部全員が呼び出された。何かと思うと信じられない事を先生から伝えられた。

「あんた毎日部活だの塾だの頑張ってるけど無理してない？あんたは自分の限界を知らずに頑張りすぎちゃうことあるから。体こわれるよ。」

と反抗期の私にはうざいと感じる事を言われた。私は、  
「うっさい。頑張ってる人の気持ちを沈めるような事言わんでよ。てかお母さんは私の何を知ってるん？なんでも知ってる的なこと言うなよ、うざいな。」

とかなり強い口調で反抗してしまった。でもそれぐらいうざかった。お母さんは私の顔を一瞬見つめてすぐにどこかへ行った。私は少し言いすぎたかなとは思ったが気にせずスマホを触っていた。

翌日、お母さんは昨日のことを忘れているかのように、平然としていた。だから私もふつうに楽器を吹きに行っただけ。その日の練習はなんだかいつもよりきつかった。

その日の夜いつものように家でお風呂に入っていた。そのとき急に全身に力が入らなくなり、頭の意識も遠のいていった。誰かが私の名前を叫んでいる。

私はベッドの上で目を覚ました。ゆっくり隣に目を向けるとそこにはお母さんがいた。私は昨日のことが蘇り、目から涙がぶわっとあふれ出た。お母さんは私の気持ちを察してくれたのか、無言でいてくれた。しばらくして私はお母さんにか細い声で、

「ごめん。」

と言った。お母さんはぎゅっと優しく手をにぎってくれ

「失格になりました。」

「えっ。」  
と思わず私は声が出てしまう。集められた場所は鼻をすする音、泣きすぎて嗚咽している音であふれる。そんな中私の背中はずいぶん温かかった。お母さんがさすってくれていた。お母さんは、

「ゆうりは頑張ったよ。」

と言いつつ私を慰めてくれた。私はそのときお母さんの偉大さに気づいた。その日は私にとって一生忘れられない日だ。

私はこの経験から反抗期も終わり、お母さんには感謝を伝えるようになった。私は心配性すぎるお母さんが大好きだ。

「ありがとう、お母さん。」